二十歳の誓い

私は人と話すことが大好きです。友達と話している時間が何よりの癒しであり、元気をもらえます。そんな私にとって、高校入学直後、新型コロナの影響で学校に行けなかった期間は苦痛そのものでした。楽しみにしていた高校生活は短くなるし、友達とも直接話すことが出来ない状況に悶々とした思いを抱いていました。

そんな中、高校で使用していた学習アプリを通じて、クラスメイトの１人が自己紹介をはじめたのです。「一回しかない高校生活やし、どうせ短なったんやから、なんかしたいよなあ」という思いから始まった自己紹介リレー。人と話す機会が減っていた私にとってこの動きは希望の光に感じられました。

自宅待機が終わり、久々に全員が教室にそろった日、ただの文字列だった自己紹介が急に彩りを持ち、ずっと前からお互いのこと知っていたような感じがしました。その日のうちに40人全員のグループLINEが完成し、私たちの高校生活が始まったのです。

LINEというものが自分の高校生活をより豊かにしてくれたと感じた経験でした。

私は、小さい頃からディズニーが大好きです。ある時プリンセスのアリエルと話せる機会がありました。ところがアリエルが話しかけてくれているのに、彼女の英語がさっぱり分からず、悔しい思いをしたのです。それから幼いながらに、“英語を勉強して、プリンセスと英語で会話する”という夢を持ちました。

そして高校生になったら、海外に関するイベントにはできる限り参加し、様々な国の人たちとつながりたいと思っていましたが、現実にはコロナの影響で国際交流イベントは次々とつぶれていきました。そんな中、放課後にリモートで、台湾の学生と交流する機会があり、その場でインスタグラムを交換し、DMでのやり取りを始めたのです。そして、実際に会ったこともないのに、SNS を通じて、自分の視野が一気に広がって行くのを感じたのです。リモートやSNSというものは、私たちの世代にとって大きな存在であると実感しています。

「人とつながる」ということは「誰かに希望を与えることだ」と思います。

私の名前は心に希望と書いて“心希”と言います。これまでの人生で、色々な人から希望を与えてもらった分、これからは、人に希望を与えられる、そんな人間になりたいです。そして京都と世界をつなぐグローバルな人物になることを、二十歳の誓いとさせていただきます。

令和７年１月１３日　青山　心希

二十歳の誓い

僕は小学6年生の時にクラス全員で、京都検定にチャレンジしました。それから一年後の中学1年生の時に突然電話がかかってきて、「ジュニア京都観光大使に任命されました」と言われたんです。

正直、最初はなんのことかよーわからんかったのですが、参加してみると、国立博物館や修学院離宮に行って京都の歴史を学んだり、老舗和菓子店での和菓子作り体験とか、滅多にできない経験ができたことで、僕は京都に興味を持ちました。そして京都文化コースのある高校を選択しました。そこでは、通常の勉強以外に、すぐ隣にある京都御苑や街の歴史を学んだり、フィールドワークを中心とした体験的な学習ができたのです。土地の歴史や成り立ちを知っていく中で、いつの間にか「散歩」というどこか大人な趣味ができました。京都の街を歩いていると、頭の中にある「昔」と目の前にある「今」が重なって、まるで、タイムスリップしているように感じることができるんです。

そんな僕ですが、部活動では野球部のキャプテンを務めていました。でも高校2年の秋、新型コロナの影響で部活動ができなくなってしまったんです。それは思春期の僕たちにとってあまりにも大きすぎる壁となりました。部活動が再開されてからも活動時間の制限などでモチベーションが上がらず、雰囲気の悪い毎日が続いてしまい、キャプテンであるはずの僕自身もその空気に流されてしまっていました。ほんっまに、反省しています。

でもそんな自分に監督が、「お前が変わればチームが変わるんや、だから頑張れ」と声をかけてくださったんです。

「いやいや、そんなわけないやろ」と思いながらも、次の日から誰よりも早くグラウンドに行き、誰よりも声を出しました。さらに人に対して強くものが言えない性格でしたが、チームメイトに対して、時には厳しい言葉をかけるようにしました。すると2週間ほど経つと、僕の行動が、1人、2人と広がっていって、なんと1ヶ月経つ頃にはそれがチーム全員の当たり前の行動へと変わったんです。本当に、自分の行動でチームが変わったんです。

「自分が変われば相手も変わる」「自分が変われば周りも変わる」今でも大切にしている言葉です。

散歩や野球だけではなく、もう一つ高校時代に打ち込んでいたものがあります。それは「漫才」です。中学3年から興味を持ち、高校3年生の冬に、「高校生漫才日本一」を決める大会に出場し、全国６７９組の中から、優勝して、日本一になりました。それが日曜日だったこともあって次の日の学校ではみんなから「おめでとう」「すごいやん」と祝ってもらい、とても嬉しかったんですが、その次の日からは何事もなかったかのように何も言われなくなったことは少し寂しかったことを覚えています。

今は大学に通っていますが、卒業後は副賞としてもらった特待生の権利を使って、NSC、吉本養成学校に行きます。私の目標は、誰からも愛されるお笑い芸人です。これまでの経験やご縁に感謝し、この目標を叶えることを「二十歳の誓い」とさせていただきます。

本日は私たちのためにこのような盛大な記念式典を開催していただきましてありがとうございます。心より御礼申し上げます。

令和７年１月１３日　石山　蓮也

二十歳の誓い

新型コロナのニュースが報道され始めたのは、公立高校入試の合格発表を待っている時でした。初めはネットニュースの端だった記事がたちまちトップになり、残りわずかな中学生活や仲間との別れは、コロナによってあっけなく終わったのです。
高校に入学しても状況は変わらず、名前しか知らない先生から、使ったことのないアプリで課題が届き、分からないことがあっても、入学式で顔を見ただけのクラスメイトに聞ける勇気はありませんでした。

そして2ヶ月後、ようやく待ちに待った高校生活が始まったのですが、想像していたものとはかけ離れていました。まずクラスメイトと仲良くなろうと思いましたが、昼食時間は前を向いて静かに食べる。部活動が始まっても、目標となる大会は中止。活発が売りの文化祭ですごく楽しみにしていたダンスパフォーマンスも、事前に録画したものを教室に見にきてもらうというのは本当に味気ないものでした。
2年生の時は、文化祭も開催されませんでした。部活動や学習活動への規制は少しは緩和されたものの、ほぼ全てを経験していない私達の代はうまくいかないことばかりでした。「もしコロナがなかったら、もっと違う高校生活を楽しめたんと違うかなあ、私が知らへんかった楽しさがそこにあったんちゃうかなあ」こんな悔しい思いを持ちながら卒業し、大学生になりました。

やっと自由に活動出来るようになったはずなのに、毎日の授業と課題にバタバタと追われ、「新しいことに挑戦できていない！」そんな時に目に入ったのが、「二十歳の誓い」の募集でした。始めはもちろん不安でした。リアルな世界では、コロナの流行を経て、1人だけ違う行動をすることは許されず、他人からの視線や評価に過敏に反応してしまう風潮があります。以前から前に出て声を使うのが好きだった私ですが、なるべく目立たないように、なるべく人の目に留まらないように、無難に過ごしたいという保守的な考えをするようになっていました。
二十歳の誓いに応募するという一歩を踏み出した今、私は閉じこもっていた殻を少しでも破れたのではないかと思っています。祖母はいつも「今ある環境で全力で頑張り、楽しみなさい」この言葉をかけてくれました。いつまでもコロナを言い訳にし、閉じこもっているようでは大人にはなれない！今ある環境で全力で頑張り、今ここから第一歩を踏み出し、まずは管理栄養士の免許取得を目指して前に進んでいくことを「二十歳の誓い」とさせて頂きます。

令和７年１月１３日　小谷　美陽

二十歳の誓い

2021 年高校 2 年生の 4 月、コロナのパンデミックの中、カナダの国境が開いた瞬間、私は留学のために日本を飛び出しました。留学先は、都会のトロントから車で 3 時間、ほとんどの人が家畜を飼って自給自足をしている Formosa という地域です。Formosa は、電気や近代的な技術を使わずに、馬車や蝋燭を使って生活をしている地域で、外部からの情報が極端に限られている地域でした。そんな地域に飛び込んだ私は、まず同年代の友達から、「アジア人がコロナを持ってきた。」という差別を受けました。どんなに否定しても、親や学校の先生から教えられたことだけを信じるため、聞く耳を持ってもらえませんでした。

これは私が初めて体験した孤独というものでした。そんな時に教会のお祈りに参加する機会があり、そこでウクライナの難民の方と知り合いになりました。彼女は毎日教会にきて、「早く戦争が終わりますように」と、祈っているのです。彼女から戦争の話、戦場に出ている父親が心配なことなどを聞いているうちに、何だか自分の苦しみが小さく感じるように思えてきました。私も苦しい日々を過ごしていましたが、それは今だけの苦しみであって、ウクライナの彼女にとっては、終わりが見えない苦しみや辛さと、これから先もずっと戦い続けなければならないのです。この出会いをきっかけに、難民の方たちの助けになりたい、という思いが私の中に湧いてきました。

最初のホームステイ先では、話し相手もなく、学校に行っても味方がいないという環境はあまりにも辛く、とうとう耐えられなくなり、都会に住んでいるホストファミリーの家に移ることにしました。元々日本のことを知っているトロントのホストファミリーは、日本のことが大好きで、私のことを本当の家族のように暖かく迎えてくれました。難民問題についてや私の将来のことなど、私の考えを様々な角度から聞いてくれる素敵な存在でした。この家族との出会いをきっかけに、その後のカナダ留学で難民問題に対してのプロジェクトを開き、今まで見ることのできなかった世界を見ることができました。

トロントの環境は、ホストファミリーだけでなく、街でも、みんな私に笑顔で話しかけてくれるとても温かい地域でした。このように、同じカナダでも、車で 3 時間の距離で対応が全く違うということを知りました。そして日本に帰ってからも、難民問題を一人でも多くの人に知ってもらいたいと、交流会活動を続けています。

私の目標は、先入観にとらわれず、物事を様々な方面から捉えることができるようになることです。そのためには、これから国際関係学や政治学など学ぶことはたくさんあります。そしていつか日本だけでなく、世界の国においても、不条理な苦しみにさらされている人の助け舟になりたいです。このことを「二十歳の誓い」とさせていただきます。

本日は私たちのために、このような盛大な記念式典を開催して頂きましてありがとうございます。心より御礼申し上げます。

令和７年１月１３日　川﨑　彩加